

平成 22 年 11 月 8 日

賢治童話と子ども読者

宮川健郎

宮沢賢治の童話は、賢治の生涯や思想とかかわって論じられることが多いけれど、子ども読者は、それをどう読むのでしょうか。講師自身がかつて試みた、子どもたちへのインタビューや調査を踏まえて考えます。また、賢治童話の絵本化や紙芝居化のもつ可能性と問題点についてもふれる予定です。

I 賢治童話とメディア

1 紙芝居

- ・堀尾青史脚本・宇田川種治絵画『キツネノゲントウ 宮沢賢治「雪渡り」より』ほるぷ出版 1984、原作は日本教育画劇 1942)

2 マンガ

- ・ますむらひろし『風の又三郎』『グスコーブドリの伝記』（朝日ソノラマ 1983）

3 絵本

- ・「やまなし」の絵本化

〈宮沢賢治の作品が誇らしげにふり撒いている魅惑のもっともおおきなものは、並外れて自在な眼のおき方にあるといえる。〉（吉本隆明「宮沢賢治」、『悲劇の解説』筑摩書房 1979 所収）

- ・「セロ弾きのゴーシュ」の絵本化

茂田井武の 2 冊（福音館書店 1966、『こどものとも』1956 年 5 月）

〈トランペットは一生けん命歌ってゐます。／ヴァイオリンも二いろ風のように鳴ってゐます。／クラリネットもボーボーとそれに手伝ってゐます。／ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿のようにして楽譜を見つめながらもう一心に弾いてゐます。〉（原作）

〈とらんぺつとは、ぷーぱ ぷーぱ ぷぱ、／くらりねつとは、ぼーぼー、／ばいおりんは、ぎーこ きーこ。／ゴーシュは、セロを、ごうごう、ごうごう、いっしょうけんめいに ひいて いました。〉（『こどものとも』、佐藤義美による再話）

原作の語りの「三人称」と、小林敏也の絵本（パロル舎 1986）の「一人称」

- ・参考 宮川健郎「賢治の語り、絵本の視点－賢治童話の絵本化をめぐる覚書－」（『日本児童文学』1996 年 11 月）

4 教科書

- ・高校現代文教科書の「永訣の朝」と、『新校本 宮澤賢治全集』年譜篇の永訣の朝。一つのすぐれた「作品」としての「永訣の朝」。

〈瀕死の床にある妹への愛情と、永訣の悲しみ、それを超えた、万人の幸福の祈り。最愛の妹の死に臨んで、作者は深い法華経信仰に基づく天上界への希望を見だし、死に対する恐れと悲しみ、いとおしい者を失う喪失感を、〈天上界への転生〉という希望へと昇華させていく。死んでゆく妹、そして他者のために自己の「すべてのさいはひ」を捧げようとする作者の思想から生まれる崇高さが、詩の主旋律である妹への鎮魂を深い祈りで彩っている。〉（「主題」、『新編現代文』東京書籍・教師用指導書 2008）

- ・参考 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』（図書新聞社 1966）
- ・「やまなし」と畑山博「イーハトーヴの夢」（光村図書 6 年、2002～）
- ・「賢治神話」からの解放のために

II 賢治童話と子ども読者

1 賢治童話は児童文学か

- ・石井桃子他『子どもと文学』（中央公論社 1960、のち、福音館書店）
〈私たちは、宮沢賢治のかなりたくさんの作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人をさえ楽しませることができたのだと信じます。〉
作品構成がしっかりしているため、「何かの期待を終わりまで持ちこし、それがとうとう解決されないという気分を」残さないこと。単純で、くつきりと、眼に見えるように描かれていること。子どもの文学にたいせつなユーモアやゆたかな空想力。
- ・神宮輝夫「賢治童話と『児童文学』としての資格」（『どんぐりと山ねこ』大日本図書 1968 所収）
〈わたしは作品の完成度の高さよりまえに、賢治の童話には、子どもの文学としての資格をえたものと資格がないものの二種類があると考えています。〉

2 子どもはどう読むか

- ・「紳士？ あ、獵師？ 獵師は、あの、おなかがすいててね、……」（小 6・男）
- ・〈二人の青年紳士が獵に出て路を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まらない反感です。〉（童話集『注文の多い料理店』広告ちらし）
- ・インタビュー→（仮説）→大量アンケート
- ・参考 桑原武夫『『宮本武蔵』と日本人』（講談社現代新書 1964）

3 「未分化の児童文学」としての賢治童話

- ・ストーリーとテーマ
- ・ストーリーをささえるもの
 - くりかえし／擬人化／オノマトペ
 - 昔話の語りとの類似性
- ・参考 宮川健郎『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍 1993）

資料

- ① 吉本隆明「宮沢賢治」（『悲劇の解説』筑摩書房 1979 所収）より
- ② 『新校本 宮沢賢治全集』第一六卷(下)年譜篇（筑摩書房、2001）より
- ③ 石井桃子他『子どもの文学』（中央公論社 1960、のち、福音館書店）「宮沢賢治」（執筆は瀬田貞二）より
- ④ 神宮輝夫「賢治童話と`児童文学`としての資格」（『どんぐりと山ねこ』大日本図書 1968 所収）
- ⑤ 「奈良梨採り」（関敬吾編『日本昔話大成』第五巻 角川書店 1978 所収）
- ⑥ 山元隆春「読者論の具体的展開」（田近洵一他編『「読者論」に立つ読みの指導』小
学校高学年編 東洋館出版社 1995 所収）より